WEB PAGE Ⅳ

田畑益弘

太陽書房

目次

２００１年８月　・・・・・・・・・・　５
２００１年９月　・・・・・・・・・・　19
２００１年10月　・・・・・・・・・　３６
２００１年11月　・・・・・・・・・　５５
２００１年１２月　・・・・・・・・・　７４
２００２年１月　・・・・・・・・・・　９４
２００２年２月　・・・・・・・・・・　111
２００２年３月　・・・・・・・・・・　１２７
２００２年４月　・・・・・・・・・・　１４３
２００２年５月　・・・・・・・・・・　１５７
２００２年６月　・・・・・・・・・・　１７２
２００２年７月　・・・・・・・・・・　１８７

２００１年８月

「踊り」五句

踊りをり死にたる人に瓜二つ

背姿の亡母に似てゐる踊りかな

手も足も魂(たま)も揃ひて踊りけり

父祖の地に影もさやけく踊るかな

輪の中に死人(しびと)もまじる踊りとよ

納骨を済ませてきたる端居かな

納骨も済み茫々と文月来ぬ

百姓の影くろぐろと旱(ひでり)かな

旱る地に滂沱の汗を零しけり

蝉の屍のまことに軽(かろ)き吹き溜り

黙祷の血潮の色の晩夏光

触るれば毀(こぼ)る八月の弾痕か

砂になつてゆく八月風化して

「原爆忌」四句

一分の短く永き原爆忌

唖蝉の一日の永き原爆忌

口開いて仰ぐあを空原爆忌

機上よりヒロシマを瞰(み)る原爆忌

「終戦忌」七句

位牌拭く懇(ねもご)ろに拭く終戦忌

父母逝きて昭和はとほし終戦忌

窓開けて蝿を逃がしぬ終戦日

地に羽撃(はたた)く片翅の蝶終戦日

蝉の屍のみんな仰向け終戦忌

落蝉の落ちてなほ鳴く終戦忌

真顔とは哀しきかほよ終戦忌

端居してペットボトルの真水かな

七夕竹雨をいざなふ夕風に

星合の夜の美しき雨あがり

星合のグラスの氷触れて鳴り

母も父も逝きてひとりよ星祭

夜の秋こころ細げに猫の鳴く

亡き父母のすでに来てゐる夜の秋

しんみりと独りごちたる夜の秋

ほんとうにひとりとなりて盆用意

真水飲み身ぬち綺麗に星まつり

こころもち軽き身となり星まつり

中年の願ぎ事さもし星祭

流れ星猫に一瞥されしのみ

遠花火おもひおもひの闇抱きて

遠花火せつなき闇を残しけり

どうかもう忘れてください遠花火

花火ひらくそら似と思ふおもざしに

秋立つや雲美しく儚くて

残暑へとガチャリと鍵を掛けて出る

くらがりに老いの坐しゐる残暑かな

さりげなく哀しきけふも水を打つ

なかんづく母偲ばする南瓜(かぼちや)かな

母偲ぶ何はさておき南瓜の黄

烏瓜(からすうり)咲き白きレースに夜来てをり

縁側に海を見ながら西瓜食ふ

西瓜冷されゐていつ食ふいつ食ぶる

泣き顔のひとが水やる朝顔なり

朝顔がけさも父母偲ばする

朝顔に父母すこやかな日々ありき

美しき家族の日々や牽牛花(けんぎゅうか)(=朝顔)

露草の一所懸命咲きにけり

人は泣き露草は露こぼしけり

がつくりと椅子の昼寝の永かりし

コンビニもスーパーもある帰省かな

誰もゐぬ縁の蚊遣火盆の月

母亡くて他郷の如し盆の月

流れ星あすのことすらわからない

星流れ消え陋巷に死する者

父母のいのち敢へなく星流る